

奈良町の伝統行事(地域の社寺の行事)の実態調査報告書

平成 31 年 3 月

奈良市

奈良町の伝統行事(地域の社寺の行事)の実態調査報告書

本調査の背景と目的

奈良市は2017(平成29)年度に「新奈良町にぎわい構想」を策定し、奈良町での「町づくり活動」を原動力に、「歴史・文化」を基盤とした「暮らし」「生業」「観光」の相互循環を創り出す、歴史都市型のコンパクトシティを目指すことを明らかにした(奈良市2017)。その具体的な取り組みとして6つの事業を立ちあげている。そのひとつが「地域の伝統行事の紹介」であり、奈良町の地域で行われている伝統行事やお祭りを網羅的に把握・調査し、紹介する冊子を作成することを目的としている。本調査はこの冊子の作成のために実施された。この報告書は調査の過程で明らかになった近年の祭りの動向やその背景について、より詳細な記録を残すために作成されたものである。

今回の事業に先立って行われた自治会へのアンケート調査の結果では、新しいイベントよりも古くから続く伝統的な行事を大切にしたいという意見がみられた。また、歴史と文化に支えられた格調高い行事を内外に発信し、観光に結びつけてほしいという声も聞かれた。

こうした背景のもと、本年度は、奈良町における伝統行事のなかでも神社の祭りに焦点をあてて調査を行った。祭りは、大きく分けて、神に向かい祈願をする神事の部分と、参加した人びとが楽しむ賑わい行事の部分とで構成されている(森田2015)。一般にお祭りとして認識されているのは後者の部分である。今回の調査では、神事よりも神賑わいの行事にあたる部分を中心に調査を実施した。

祭りの変容とその背景

聞き取りの結果を総合してみると、全体に、祭りの主催に関与する人びとや祭りに参加する氏子等の人びとの減少がみられ、傾向としては祭りが衰退しつつあるように見える。しかしながら、奈良町において単純に伝統的な行事の衰退が起きているとすることには慎重でなければならないだろう。

現在行われている奈良町の神社の祭りは、その起源を古代から中世に遡るものも珍しくない。その後いったん衰微し、なかには中断に至る祭りもあった。しかし、明治期に入り復活し、現在の形となっているものもある。このように大きなスパンでとらえたとき、必ずしも衰退一辺倒で推移しているわけではない。現在の祭りに対して衰退を語るとき、近代、おそらく昭和期前半ごろの盛り上がりを基準にとらえるために、そうした印象をもつことになるものと考えられる。

また、短期的なスパンでみるならば、祭りの賑わい行事の部分について、形を変えたり、新たな要素を加えたりして参加者を取り戻そうとする試みがみられるし、実際のところ、最近では参加者が増加している祭りもある。後述するように、祭りを支える組織や人びとも変化がみられ、現代の社会的な変化に適応する祭りの姿が模索されつつある。

ところで、日本社会において、祭りのあり方を変容させた一般的な要因には、次のようなことがあげられよう。

①人口の社会的・経済的構成の変化

都市部においても人口の絶対的な減少と、少子高齢化という人口構成の変化が、祭りの維持を困難にさせている。また、産業構造の高度化や流動人口の増大によって、祭りのような地域の伝統的な行事を支える条件が失われてきた。商業や農業に従事する自営業者が減少する一方、企業に勤める雇用労働者が増大したことは、祭りへの参加に対する制約となって働いてきた。

②共同体への帰属意識の低下

地縁・血縁を基盤とする共同体への帰属意識やそこでの紐帯が弱まり、消費社会的な生活の広がりや背景に、より個人中心の意識や行動が広まってきた。また、氏神への信仰や祭りを支える氏子としての意識や行動も失われてきたものと考えられる。

③多様な楽しみの増加

かつて、祭りは数少ない非日常の楽しみの場であった。現在では、サービスの生産・消費を中心とする経済が発展するなかで、娯楽、スポーツ、芸術、旅行あるいはショッピングといった余暇活動の機会が拡大している。各種のイベントが日常的に催され、テーマパークが現れるなど、非日常的な楽しみの場は広がった。お祭りは、これらの新しい楽しみの対象との競合を余儀なくされている。

今回の調査の過程でも、祭りの関係者が、これらの要因について言及することがあり、奈良町においても、同様の背景要因が近年の祭りの動向に作用しているものと推測される。

祭りの神聖性・伝統性——神事へのこだわり

祭りは、大きく分けて、神に向かい祈願をする神事の部分と、参加した人びとが楽しむ賑わい行事の部分とで構成されている(森田 2015)。奈良町の神社の祭りは、地域の人びとによって支えられている点は共通するものの、その規模や内容、参加者など様ざまであり、ひと括りにすることは難しい。ただ、祭りを構成する神事の部分については、全体として大きく相違する点は見いだせない。いずれの神社においても、修祓、献饌、祝詞奏上、玉串奉奠など、定型化された式次第にしたがって粛々と進められていた。多くの神社において、祭りの核となる神事の目的は、本来、五穀豊穡の祈願や感謝を神様に伝えることと考えられている。だが、産業構造の高度化や都市化によって農業人口が減少し、本来の趣旨だけに則った祭りの催行は難しくなっている。現実的な対応として、神賑わい行事に集客力のある催しを導入することによって参加者の増加を図ることが試みられる。しかしながら、その場合でも、神社および祭りの主催に関わっている人びとは、祭りの本旨である神事の重要性にこだわっていた。

ところで、祭りの伝統性を成り立たせるものを考えたとき、その開催日(時期)が固定されていることが一つの要件となろう。この点に関して、多くの神社で語られたのは、氏子の一部から祭りの土曜・日曜開催の要望が出ていることである。主催者・参拝者ともに平日に融通の利く自営業者が減少し、大半が雇用労働者となっている。また、学校の生徒も平日では参加が難しい。そのため、土・日開催に変更することには一定の合理性がある。しかしながら、祭りの主催者には、あくまで神事であり変更すべきではないとの見解が共通してみられ、これまでの日程へのこだわりが強い。また、後述するように、異なる神社の宮司どうしの扶助によって祭りが成り立っており、その観点からもパターンが確立されている現行の開催日の変更は難しい。

神賑わい行事の変化

一般にお祭りとして認識されているのは神賑わいの行事にあたる部分であるが、これについてはどうであろうか。御渡りについては次節で述べることにして、ここでは奉納する芸能や催し物についてふれる。

「祭りの形態を残しているのは本祭だけやと思う」(八坂神社)との語りもみられたように、奉納する芸能や催し物については、様ざまな試みが行われており、その変化は大きい。この背景には、ごく一部の祭りを除いて、少子高齢化の進行による稚児や子どもの参加の減少がある。そのため、八坂神社、天神社、鏡神社などの神社では、子どもの誘客の工夫をしている。たとえば、子どもが出演する舞台演目の設定や、子どもが楽しめる催し物やキャラクターの活用、さらにはビンゴ大会のような参加型イベントが行われていた。特に福引は集客力があり、5か所の神社で実施されていた。

神楽のような伝統的な芸能を奉納する一方、太鼓やシンセサイザーの演奏など、現代的な音楽、舞踊を奉納する祭りも多くみられ、新旧の芸能や催し物が混在して祭りを構成し

ている。さらに、太鼓演奏や福引に関しては、かつては実施していたが取りやめた例もある。また、一時期はカラオケを導入していた例もあった。このように比較的短期間に演目やイベントの内容が変化している。調査対象とした祭りは伝統的なものであると言われているが、神賑わい行事の部分については、実際には随時生成していく構築的な性格をもっていることがわかる。

神賑わい行事のイベント化は、いきおい、神事と賑わい行事の分離を起こしかねないが、各神社では、そうしたことが起きないように意識し、努力をはらっている。たとえば、飛鳥神社では、祭りの参加者が福引だけを目的に来て帰ってしまう事態が生じたため、必ず参拝をするような導線の設定をしている。采女祭りでは、神事に関与する部分は、すべて春日大社の決定に委ねて保存会等は関与しないことになっている。一見すると大がかりで煌びやかな演出の賑わい行事ととらえられるが、神様に関わる部分は明瞭に区別がなされている。

さて、このように賑わい行事の変化がみられる一方、保存会によって芸能を継承する努力を重ねている祭りもある。代表的なものは、奈良豆比古神社の翁舞である。翁舞の場合は、国指定の重要無形民俗文化財という価値づけがなされているため、当然のことながら伝統的な姿を変えることはできない。氏子らに対して見せる性格は有するものの、第一義的には神に奉納する芸能であり、神事とみなす方が妥当かもしれない。そのほかにも、漢國神社では獅子舞や神楽の稽古が行われ、舞の担い手を絶やさない努力がなされている。

現在の御渡り

さきに記したように、様ざまな社会的な変化を背景にして、祭りへの参加者は減少する傾向にある。とくに若者の減少が著しく、その結果、神輿の担ぎ手が不足することになり、御渡りが途絶えてきたことは多くの神社で共通する現象である。八坂神社や狭岡神社のように、御渡りは実施できないが、神輿を境内に出して参拝者に観てもらおうという措置をとっている例もあった。本来は氏子町を巡行すべきだが、やむなく現在の姿となっている。崇道天皇社や氷室神社の宮司の話からも、神社や古くからの氏子のあいだでは、御渡りを復興したいという願望が存在することがうかがえる。実際、長年行われなかった御渡りを再開する動きもある。手向山八幡宮では、御鳳輦と呼ばれる神輿を新調して御渡りに備えている(2018年は雨天中止)。

各神社とも御渡りのコースの設定には気を配っている。そこには氏子町の範囲をできるかぎり巡ろうとする意図が働いている。聞き取りによれば、御渡りが隣の氏子町に入るとは、ある種の領域侵犯でタブーとされ、担当者の単純な誘導ミスであっても許されないという。

ところで、御渡りの減少のひとつの背景要因として、モータリゼーションの進行による車の交通量の増大がある。それが御渡りを難しくしていることは現地の観察からも確かめられた。これに関連して、多くの神社が、御渡りの交通規制を管轄する警察行政のあり方を問題としていることがわかった。具体的には、警察に何回も足を運ばなければならない

こと、それにもかかわらず容易に許可が下りないこと、道路の使用に関して細かく規制がかけられることなどが指摘されていた。神社側は、安全への配慮が必要であることは理解しつつも、警察行政の煩雑な手続きが負担であるだけでなく、その姿勢が形式的で権威主義的なものであると感じているようである。

支える人や組織の変容

氏子町をもつ神社の祭りの場合、それを支える最も基本的な要素は氏子の存在であるが、全体に氏子の数は減少しているし、氏子であるという意識をもたない人が増えている。氏子をもつ神社では、年番となった町が担当する形が基本である。近年、担い手が減ってきたことから、年番の町の数を増やす例が多くみられた。

祭りの支持基盤の弱体化については、氏子の人口減少よりも、氏子であるという意識が失われ、神社や祭りへの関心が低下していることがより重要な要因と考えられる。また、奈良町の外縁部では宅地化による新住民の増加があり、祭りと距離を置く人びとが増えてきたことも影響していよう。たとえば、崇道天皇社の場合、南紀寺、東紀寺の地域も氏子の範囲であるが、これらの地区は田んぼだったところに新興の住宅ができた場所であり、氏子町としては入っていない。飛鳥神社の場合は、後からできた葛城団地は氏子町の範囲だが、実質的には会費の負担を相当に軽減することで現状への対応をはかっている。

自治会と祭りの関係

奈良町の地域の住民は、ある自治会に入れば、自動的にその町の氏神の氏子ということになる。ただし、自治会と氏子の範囲は必ずしも一対一で対応していない。椿井町の場合、御霊神社、氷室神社、漢國神社の三つの氏子の範囲が含まれており、同じ町の自治会員でも氏神が異なることがある。なお、氏子の範囲が重複することはない。

多くの祭りは自治会の支援によって維持されている。自治会は、祭りの費用を自治会員から徴収して運営に充て、役員が神事に参加するなど、人的・経済的に祭りを支えている。これに関して中田実らは、多様な住民を構成する町内会・自治会が、特定神社の例大祭などへの寄付や宗教行事への参加要請をすることは、会員個人の信教の自由を侵すものとして不適当であると指摘している。また、神社祭礼は、その神社の氏子集団なり奉賛会が主催し、寄付や祭りへの参加などは地域住民の自由な協力のもとに行われるべきだと主張している(中田・山崎・小木曾 2017: 38-39)。

奈良町の神社での聞き取りからは、祭りの参加を強制することは許容されないし、お参りをする、しないはまったく個人の自由という認識が共通にあることがうかがえる。歴史的にみれば、氏子町が自治会に転換されてきたのであり、自治会と祭りとの関係も慣習的に維持されてきたということであろう。神社側も、現状の自治体との関係を是認しているわけではなく、信仰の自由との整合性を意識している。たとえば、漢國神社の宮司は、実行委員会などの形態をとって、自治会と神社の祭りは切り離される方が望ましいと述べている。しかし、当面の方法としては、完全分離ではなく、自治会に祭り担当の役員を置いて、

費用の調達や祭りの仕切りを専任で行うべきとの見解であった。実際に鏡神社の祭りはこの方式で運営されている。八坂神社の場合は、奉賛会を組織し、自治会とは一応区別して祭りを実施している(ただし、資金の調達は自治会を経由しており、実質的には分離されていない)。

こうした認識は、先ほどの中田らの主張とほぼ重なりあうのであり、あるべき方向性としては妥当なものといえるだろう。

神社(宮司)間の相互扶助

現在、全国的にも宮司が不在の神社が多くなっているが、調査対象 14 神社の半数は宮司が常駐していない。それらの神社の祭りでは他の神社の宮司が兼務しており、当日、現地に外向する形をとっている。具体的には、飛鳥神社には氷室神社の宮司が、蛭子神社には手向山八幡宮の宮司が、鏡神社には漢國神社の宮司が、それぞれの祭りに出仕している。

また、崇道天皇社、御霊神社、手向山八幡宮の 3 つの神社では、祭りの進行を当該神社の人員のみで賄うことは難しいため、互いに出張して助け合うことで祭りを維持している。これらの神社間については、相互派遣による扶助という慣習が数十年前から行われてきたという。

夜店の変容とコミュニケーションの場

かつてはほとんどの神社の祭りにみられた露天商(いわゆる的屋)の夜店が、近年では急激に減少ないし消滅している。その要因としては、祭りの参加者、とくに子どもの減少によって商売が成立しなくなったこと、警察による道路使用の規制が厳しくなり、神社側が手間を割けなくなったことなどがある。

露天商に代わって、近隣の事業者の集まりが夜店を出すケースが出てきた。八坂神社では、比較的に新しく開業した店で構成する「きたまち week」という組織が、神社の境内を借りてイベントを実施したことをきっかけにして、祭りでも出店することがこの 3 年間行われている。御霊神社では、奈良町でまちづくり活動を行っている「奈良町座」が祭りにかかわっており、御渡りへの参加や夜店の運営を行っていた。

また、氏子や周辺の住民、事業者によるボランティア的な活動が祭りの夜店や催しを担っている例もみられた。蛭子神社では、地域の有志でつくる「えびす会」が、祭りの際に無料の豚汁のふるまいを含め飲食物の提供を行っている。これは年に一度、地域の人びとが交流する場を作る要素となっている。崇道天皇社では、近年始まった夏祭りでは、金魚すくい、綿あめなど、子どもを対象者にした小さな夜店が並ぶが、これらは主に地元町内の氏子によって担われている。夜店を設置したことには、地域の子供たちが集まって楽しめる機会が少なくなったため、そうした場を創る意図がある。このほか天神社でも同様の取り組みがみられた。

以上のような事例は、神社の祭りが、新たに地域のコミュニティを形成する起点としての機能を持ちうることを示唆しているといえよう。また、露店商のような営利目的ではな

いため、ボランティアな人手さえ確保できれば持続性が保てるという利点があるものと考えられる。

観光と祭りの関係

祭りのなかの神賑わい行事は、氏子に限らず外部から来訪者を受け入れるものであり、観光対象としての性格をもっている。むろん、神社によってその集客力は異なり、程度の差はある。たとえば、采女祭、三枝祭、饅頭祭のように、どちらかといえば、より観光対象としての性格が強いものもあれば、狭岡神社、鏡神社、蛭子神社などの祭りのように地域に限定的な行事としての性格が強いものもある。

近年、昭和期から続くレトロな街並みや商店街、醸造所のような古くからある地場の産業、古民家を再生活用した飲食・雑貨・ファッションなどの店舗といったものを目的に観光客が訪れる事例は増えている。奈良町もこうした街歩き型の観光にふさわしい性格を有しているし、神社の祭りもその対象となりうるであろう。

しかし、奈良町の観光地化が問題となっている今、新奈良町にぎわい構想がめざすように、「暮らしと調和する観光」の実現をはかる必要がある。つまり、「奈良町の価値や魅力を発見し、学び、好きになってもらえる多様な楽しみ」をつくり出し、「人々の交流を通じて、居住者自身が、奈良町の暮らしの価値を再発見すること」が望まれよう(奈良市2017:63)。

この点、祭りを対象とする観光は比較的に不調和がおきにくいと考えられる。というのは、もともと神社の境内は、不特定の来訪者を許容する公共的な性格を有しているし、祭りのときは大勢の人が集中することで一層その性格が際立つからである。祭りは、地元の生活圏と暮らしに位置づけられながらも、外部の観光客とのインターフェイスの役割を果たす、特殊な時空間であるといえよう。

祭りの情報発信については、神社によって意識や取り組みが異なる。地域限定的で、氏子を実質的に祭りを担っている場合は、ポスター、チラシによる告知だけで、観光での来訪者を想定していないものと思われる。一方、宮司が常駐する神社の場合は、インターネット上でホームページによる情報発信を行っており、より広範囲からの誘客を意識していた。しかし、SNSでの多様な媒体の活用はほとんどみられなかった。

ところで、聞き取り調査では、祭りの期間に限らず神社を訪れる観光客の行動の変容についても言及された。癒しや絆を求める傾向の強まりや未曾有の御朱印ブーム、あるいは、「インスタ映え」のする写真への欲求など、神社をめぐる社会的な状況も変化しており、それらが神社への新たなまなざしを生み出して観光に結びついている。また、近年のインバウンド観光の増大にともなって、神社でも外国人の訪問者が増大している。このため、外国人の神社に対する視線に注意を払う必要があるだろう。ちなみに、手向山八幡宮の宮司によれば、外国人の方が日本人より神社に真摯な態度で接することもあるという。おそらく、その背景には信仰や教会等の宗教施設に対する価値観や姿勢の差があるものと思われる。

むすび

地域で行われる祭事は、伝統的な地域の行事として、文化的価値を担っており、地域住民の親睦機能も有している(中田・山崎・小木曾 2017:40)。今日、住民をつなぐコミュニケーションの機会として、新しい形での祭事のあり方が検討されている。また、祭りは、新住民と旧住民の間で、祭りの準備と実施という共同作業の機会と共通の目的を提供してくれるし、その過程でコミュニティの住民としての共通認識が形成される可能性もある(稲葉 2016:32)。

現実には、奈良町においても少子高齢化や氏子の減少、社会的・経済的な背景の変化など、祭りの存続をめぐる環境には厳しいものがある。その一方で、各神社の祭りの主催者たちは、祭りの内容に年々工夫を凝らし更新する努力を払っているし、支援組織のあり方を検討し、周辺の新しい住民の関与を組み込む動きもみられた。そこでは、神事の部分は伝統を保ちつつ、神賑わい行事の部分では、現代的な文化を取り込み、新興住民との協力関係を築くことで、祭りの継承をはかることが試みられている。

調査した祭りに共通して言えるのは、地元地域の人びとの祭りに対する強い思い入れが感じられることであった。それは、単にかつての賑わいを懐かしむということではなく、いかにして祭りを未来に引き継ぐかという課題に真摯に向き合う姿であった。

参考文献

中田実・山崎丈夫・小木曾洋司(2017)『地域再生と町内会・自治会』自治体研究社

奈良市(2017)「新奈良町にぎわい構想」

森田玲(2015)『日本の祭と神賑^{かみにぎわい}——京都・摂河泉の祭具から読み解く祈りのかたち』創元社
稲葉陽二「都市祭礼とソーシャル・キャピタル」山田浩之編著(2016)『都市祭礼文化の継承と変容を考える——ソーシャル・キャピタルと文化資本——』ミネルヴァ書房

<調査行事一覧>（行事日程順）

- 1、率川神社三枝祭（ゆりまつり）
- 2、八坂神社祇園祭
- 3、崇道天皇社夏祭・秋祭
- 4、天神社夏祭り・秋祭り
- 5、春日大社末社采女神社采女祭
- 6、氷室神社例祭
- 7、手向山八幡宮転害会
- 8、奈良豆比古神社秋祭り（翁舞）
- 9、狭岡神社秋の大祭
- 10、御霊神社秋季例大祭
- 11、鏡神社例祭
- 12、漢國神社例大祭
- 13、飛鳥神社秋祭り
- 14、蛭子神社蛭子祭

平成 31 年 3 月 20 日

作成 奈良市
執筆 奈良県立大学地域創造学部 教授
堀野正人